3

連載エッセイ

# 「巨樹の森コンサート」に学ぶ

田村 孝子
たむらたかこ
（財）砂防・地すべり技術センター評議員
静岡県コンベンションアーツ
グランシップ館長

北海道北見市留辺蘂町（るべしべちょう）で、平成６年から開かれてきた「巨樹の森コンサート」をご存じですか？森林面積が88%を占める森林と温泉の町で、いったいどんなコンサートが開かれているとお思いでしょうか？

「何しろすばらしいから、ぜひ来てほしい！」NHK北見局の先輩に請われて私が訪ねたのは、ハイビジョンで中継した平成11年９月15日のコンサートでした。会場は、留辺蘂のおんねゆ温泉街から南へ６キロ、標高800メートルにある国有林です。エゾマツ、トドマツなどの針葉樹とダケカンバなどの広葉樹が混交した80年を超える天然林の中にある空き地（絵本で森の動物たちが集まっているような自然にできた空き地だそうです）に切り株を並べただけの場所です。林道はありますが、ふだんは山菜採りの人が訪れるくらいの森の中ですので、コンサートの観客は、町の中心から12台の専用バスでやってきた500人。町内だけでなく、北海道内からはもちろん関東からのお客様もいました。宗次郎さんのオカリナ、長澤真澄さんのハープ、土田英順弦楽四重奏団の演奏でバッハ／グノーの「アヴェ・マリア」、オカリナのソロや、森の中を歩きながらの竪琴のように小さなサウルハープの演奏もありました。その２時間あまりのコンサートは、草木や土の香りにつつまれ、木漏れ日は時間が経つにつれて変化する、小鳥にも好みがあるかのように曲によってたくさん集まったり、タイミングよく風がそよぎ、木の葉が舞う……神様や森の精の存在が確信できるそんなひとときでした。

いったいこのような「巨樹の森コンサート」は、なぜ開かれるようになったかといいますと、きっかけは森林復興記念に始めた催しだったのです。昭和29年９月に北海道を襲った洞爺丸台風は北海道各地に大きな風倒木被害をもたらしました。留辺蘂町でも当時の３～４年分の伐採量という大被害を受けたそうです。ところが森林は、自然と人の手で美しくよみがえったのです。洞爺丸台風から40年経った平成６年、北海道では森林復興記念にいろいろな催しを各地で開催しました。留辺蘂町近くの国有林にある巨木の林立する森林は「巨樹の森」と指定され、自然観察や散策を楽しめる森林に育てていこうということになったそうです。そして「巨樹の森」の整備のための基金が創立され、営林署と町の方々が一緒になって「巨樹の森をはぐくむ会」を設立し、この森林空間を活かした記念事業として「巨樹の森コンサート」が開かれたのです。第１回のコンサートはなんと村松健さんのピアノコンサートだったそうですが、楽器を運ぶのも困難なこの催しが実現したのは、村松さんがかねがね森林の中でピアノを弾いてみたいと思っていらしたのと、当時の留辺蘂営林署長と村松さんが懇意でいらしたのも幸いしたそうです。

１回目のコンサートの成功もあって、その後「巨樹の森コンサート」を続けていくために、日本の音響学の第一人者でいらした東大の橘秀樹教授に調査を依頼しました。その結果、コンサートホールとまったく同じではないが、ホールとして十分の可能性があることが分かったそうです。以来ヴァイオリンの千住真理子さんギターの渡辺香津美さん二湖の姜健華さんなど、ほぼ１年おきに「巨樹の森コンサート」は続けられてきたのです。

オカリナは宗次郎さんが、ご自分で土を使って作られた楽器で

す。チェロもヴァイオリンもヴィオラも木で、それも300年昔の楽器であり、大切に使ってきたからこそ今も名器といわれ、すばらしい音色を響かせています。この時の司会は立松和平さんでしたが、そのお話の最中にそよぐ風にハープがひとりでに鳴り出した時には、その場にいた誰もが自然の、森のすばらしさを実感したと思います。「巨樹の森」はまさしく、私たちが森林とふれあう場になっています。このコンサートの入場料は1500円、でもパンフレットには「入場料」とは書かれていなくて、「森を守る協力金」となっているのです。それは訪れたお客さまだけではなく、コンサートにかかわっているすべての人が負担している協力金なのでした。すばらしい森は皆で守っていこうというメッセージが伝わるものになっていると思いました。

日本の国土のほぼ70%が森林、そのうち約30%が国有林だそうです。災害を防ぎ安全な生活を守るために、動物や植物など自然保護のために、計画的な木材生産のために、そして私たちが森林とふれあう場の創出のためになど、さまざまな目的で森林づくりは行われています。「では、森林の有効利用のために私たちひとりひとりは何ができるのでしょうか?」私の問いに「お椀、お風呂のすのこ、お箸などプラスチックのものにくらべましたら、少し値段は高いかもしれません。でも木製品を使うのは、森林を守るためにも、省エネのためにも大切なことなのです」……「自然を守りましょう!」「環境保護に努めましょう!」とお題目を唱える前に、ひとりひとりができることがあると実感させられた言葉でした。

以後私は、高知県馬路村で作られている、やなせ杉と檜の間伐材を利用した名刺を使うようになりました。100枚で2200円、たしかに紙より高価です。しかし名刺交換したときの効果は大きいものがあります。まず「これは?」と問われ、会話がスムーズに始まります。それに、杉や檜の香りは人の心を和ませます。海外での効果はなおさらです。馬路村といえば「ゆずドリンク」発祥の村として知られていますが、この名刺をはじめとする間伐材を利用したさまざまな取り組みで、全国の過疎に悩む地域を元気づけているようです。北海道の留辺蘂町同様、馬路村の人口は1,200人足らず、面積の96%が山林で、その75%が国有林です。馬路村役場では、永遠の森づくりの実現を目指して「千年の森基金」を開設し、間伐材を使った製品の売上額1%をこの基金に積み立てているのです。

砂防・防災という言葉は、10年前にはまだ一般的ではありませんでした。地域のハザードマップさえ公開されてはいませんでした。自然破壊への警鐘が問われていたのにもかかわらずです。そして今、環境保護が声高に叫ばれるようになりました。省エネルックも、高めの室温設定も、どれほどの効果を上げているのでしょうか? 機能性、経済性を追い求めた施策のつけに、現在の植林事業があります。日光の杉並木、富良野市にある東京大学の演習林など、自然の在り様、災害の歴史から私たちが学ぶものは大きい、そんな気がいたします。北海道の留辺蘂町の「巨樹の森コンサート」は、そんな「大切なものに気づく場」でもあるのです。

イラスト:仲野順子